

錦江町におけるノドアカツグミ *Turdus ruficollis* の鹿児島県本土初記録

加藤 銀次¹・上國料 まり子²

The First Record of Red-throated *Turdus ruficollis* for the mainland of Kagoshima Prefecture, in Kinko Town

KATO Ginji and KAMIKOKURYO Mariko

キーワード：ノドアカツグミ, *Turdus ruficollis*,
鹿児島県本土初記録, 錦江町

はじめに

ノドアカツグミ *Turdus ruficollis* は、シベリア中南部からモンゴル北部・中国北西部で繁殖し、インド亜大陸北部から中国南部・ミャンマー北西部で越冬する (Collar, 2020)。日本へは稀な旅鳥または冬鳥として飛来し、全国的に記録されている (日本鳥学会, 2012; 梅垣, 2015)。鹿児島県でも離島において本種とされる複数の観察例があるが、鹿児島県本土における記録は知られていない (後述)。著者らは 2021 年 1 月から 2 月にかけて、鹿児島県肝属郡錦江町でノドアカツグミ 1 個体 (以下、本個体) を観察・撮影したのでここに報告する。

なお、本稿で扱うツグミ類の分類は IOC world Bird List (Gill *et al.*, 2020) や The eBird/Clements checklist of Birds of the World (Clements *et al.*, 2022) に準拠し、ノドアカツグミを単形種 (monotypic species) として扱った。また、同様に本種の属する科をツグミ科 Turdidae とした。

1 観察者名

上國料まり子 (初認), 吉岡敦史 (終認), 加藤銀次ほか

2 観察日時・場所

2021 年 1 月 24 日 15 時 30 分に著者の 1 人である上國料によって観察・撮影されたのが初認である。以降、著者らほか数名の観察者により継続的に観察され、2021 年 2 月 9 日の 11 時 15 分に観察・撮影されたのが終認である (吉岡敦史, 私信)。観察場所は鹿児島県肝付町錦江町神川の神川大滝公園内 (31° 15' 29" N, 130° 48' 49" E 付近) であった。

3 観察距離

約 5m から 40m の距離。8 倍、10 倍の双眼鏡を用いて観察し、焦点距離が 35 mm 換算で 960 mm の超望遠レンズを装着した一眼レフカメラ、3000 mm の超望遠コンパクトデジタルカメラを用いて撮影した。

4 観察した環境

神川大滝公園は神ノ川の河口から約 3.5 km 上流の大滝付近に位置する。滝の周辺は森林が発達しているが、川を挟む形で兩岸に公園が整備されている。本個体が観察されたのは主に公園北部の駐車場周辺で、神ノ川の右岸側であった。駐車場に隣接する斜面は落葉・落枝で覆われ、まばらに草本植物が生育していた。駐車場の南側と西側には芝生で整備された広場があった。またこれらの公園内の環境にはサクラ *Cerasus sp.* の植木があった。川沿いにはハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* またはヤマハゼ *T. sylvestre* と思われる植物が見られた。

5 形態に関する記述

本個体は同時に観察されたシロハラ *Turdus pallidus* とほぼ同大で、よく似た体型をしていた (図 1)。額から上尾筒にかけての体上面は褐色味のある青灰色であった (図 1, 2)。眼先は黒褐色で、眉斑、眼の下や腮から胸にかけては赤褐色であった (図 1)。なお、これらの赤褐色部にはまばらに淡色部が混在しており、喉の付近に縦線状の黒色部がわずかに認められた (図 1)。側胸や腹以下の体下面は汚白色で、灰色の不明瞭な斑があった (図 1)。下尾筒は無斑であった (図 1)。小翼羽と雨覆は暗灰褐色で、大雨覆は外弁の淡色の羽縁と先端部の淡色斑が明瞭であった (図 1, 2)。初列風切、次列風切、三列風切は暗灰褐色で、外弁には淡色の羽縁があった

1 鹿児島大学理学部 3 年, 日本野鳥の会かごしま県支部

2 野鳥の会かごしま県支部

(図2)。初列風切についてはP6-8の3枚に外弁欠刻が認められた。下雨覆は白っぽく、橙色味があった(図3)。尾羽は大部分が橙褐色で、中央尾羽は黒味が強かった(図2)。外側尾羽も先端付近は黒味がかった(図2, 3)。また、各尾羽の先端部は先細りする形状であった(図2, 3)。嘴は先端と上嘴の上部が黒く、基部側にかけてのそれら以外の部分は黄色であった(図1)。脚は黒味がかった肉色であった(図3)。

6 種を同定した規準

シロハラに似た体型とその大きさから、本個体はツグミ科 *Turdidae* の鳥と考えられた(Winkler *et al.*, 2020)。同科において、額から上尾筒までの体上面が褐色味を帯びた青灰色で、喉から胸にかけての範囲と尾羽に広く赤褐色部を有し、腹以下の体下面が汚白色や灰色である種は、ノドアカツグミのみである(Clement *et al.*, 2000; Winkler *et al.*, 2020)。また、本個体の大雨覆には羽縁や先端に淡色部が見られ、尾羽の各羽先端が細く尖っていた。これらは幼羽であり(Clement *et al.*, 2000; Svensson, 2011; Shirihai & Svensson, 2018,)、本個体は第一回冬羽と考えられる。ノドアカツグミの第一回冬羽において、先述の特徴を併せ持つのは雄である(Clement *et al.*, 2000; Svensson, 2011; Shirihai & Svensson, 2018)。以上より、本個体をノドアカツグミの雄第一回冬羽と同定した。

なお、ノドアカツグミはノドグロツグミ *T. atrogularis* との中間個体が知られ(Clement *et al.*, 2000)、ノドグロツグミ、ツグミ *T. eunomus*、ハチジョウツグミ *T. naumanni* との交雑例がある(Clement *et al.*, 2000; McCarthy, 2006)。そのため、本個体の中間個体、交雑個体の可能性を検討した。本個体は胸の赤褐色部には黒色が混じっておらず、また紫色味もなかったため、ノドグロツグミとの中間個体や交雑個体ではないと考えられる(Clement *et al.*, 2000, Shirihai & Svensson, 2018)。また、本個体の腹や下尾筒にかけての体下面に橙褐色部は認められなかったため、ハチジョウツグミとの交雑個体であることは示唆されなかった(Clement *et al.*, 2000; Young Guns, 2013)。ツグミは体上面の暗褐色、翼部の赤褐色、体下面の黒色など、ノドアカツグミとは配色の大きく異なる羽色を持つ(Clement *et al.*, 2000; Shirihai & Svensson, 2018)。筆者が調べた限りでは、ノドアカツグミとツグミとの交雑個体における形態的特徴を解説した文献は参照できなかったが、本個体にこれ

らのツグミのような特徴や、両者の中間的と思われる形質は見られなかったため、この組み合わせの交雑の可能性は排除した。以上により、本個体は交雑個体ではないと判断した。



図1 錦江町で観察されたノドアカツグミの左側面
(2021年2月3日 撮影：加藤銀次)



図2 錦江町で観察されたノドアカツグミの背面
(2021年2月3日 撮影：加藤銀次)



図3 錦江町で観察されたノドアカツグミの翼下面及び外側尾羽上面
(2021年2月4日 撮影：加藤銀次)

7 観察した行動

公園の駐車場に隣接した斜面では、落ち葉等をひっくり返しながらかみ採食しており、芝生の広場でも探餌していた。ただし、いずれも採食しているものは確認できず、分からなかった。また、斜面から飛び立ち、サクラにとまることがあった。さらに、シロハラに追われ、公園に隣接する林へ入る様子を観察した。本個体は主に神ノ川の右岸側で行動していたが、時折川の左岸側に移動し、ハゼノキまたはヤマハゼと思われる木の果実を食べていた。

8 過去の記録とその文献

鹿児島県内におけるノドアカツグミの記録について述べる。所崎・山元 (1999) にノドアカツグミの記載はない。ただし、所崎・山元 (1999) 以降、2004年3月平島 (関ら, 2011), 2004年11月平島 (日本鳥学会, 2012), 2006年12月奄美大島 (奄美野鳥の会, 2009; 日本鳥学会, 2012) において記録があるとされる。2006年12月の奄美大島の記録については、奄美野鳥の会 (2009) に写真が掲載されている。しかし、いずれの記録も詳細な検討を伴った報告はなされていないと思われる。

また、日本野鳥の会かごしま支部 (2021) によると、2013年3月に下甕島での記録がある。ただし、その出典元となっている日本野鳥の会鹿児島 (2013) には「ノドアカツグミ×ハチジョウツグミ?」として掲載されている。同記録の観察者である所崎聡氏によると、観察されたのは交雑の可能性のある個体であったという。よって、同記録はノドアカツグミの記録として疑義がある。

9 その他

従来、ノドアカツグミとノドグロツグミはそれぞれを亜種として含む同一種とされ、日本鳥学会 (2012) もこの考えを採用している。しかし、本稿では Gill *et al.* (2020) や Clements *et al.* (2022) などの国際的な主要チェックリストで近年別種として扱われていることを考慮し、これらに従った。

10 考察

ノドアカツグミは本来の分布域から外れて韓国、日本、台湾で記録されている (Brazil, 2009)。日本国内での記録は全国的に存在する (日本鳥学会, 2012; 梅垣, 2015)。このような記録状況を踏まえると、本個体は錦江町に自然飛来したと考えて疑問はない。また、稀な旅鳥または冬鳥とされるため (梅垣, 2015), 本記録の観察時期は妥当と言える。なお、

本個体には翼、尾の不自然な摩耗、嘴・趾のこぶといった、籠脱けを示唆する形態的特徴は認められなかった。

本記録は、鹿児島県本土におけるノドアカツグミの初記録である。また、本稿は詳細な種同定を行った、鹿児島県における本種の初の学術報告である。ノドアカツグミの識別の際には、近縁種との中間個体や交雑個体の可能性を検討する必要があると思われるため、本稿では過去の本県における過去の各記録についての精査は見送った。また、同様の理由で県内における未発表の記録の収集は行なわなかった。本種は観察例が多いにも関わらず、全国的にも観察記録が学術報告された例は少ないと思われる。本種の日本への飛来状況をより正確に把握するには、未発表の記録や、同定が不十分な記録について適切な検討の末、報告されることが望ましい。

(謝辞)

本個体の観察者の1人である吉岡敦史氏には、終認日を教えていただいた。また、所崎聡氏には下甕島の記録についての詳細情報をご教示頂いた。お二人に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- Brazil, M. (2009) *Birds of East Asia*, 528pp. Christopher Helm, London.
- Clement P, Hathway R, Byers C & Wilczur J. (2000) *Thrushes*, 464pp. Christopher Helm, London. Princeton University Press, New Jersey.
- Clements, J. F., T. S. Schulenberg, M. J. Iliff, T. A. Fredericks, J. A. Gerbracht, D. Lepage, S. M. Billerman, B. L. Sullivan, and C. L. Wood. (2022) *The eBird/Clements checklist of Birds of the World: v2022*.(online) Downloaded from <https://www.birds.cornell.edu/clementschecklist/download/>, accessed 2022-12-7
- Collar, N. (2020) Red-throated Thrush (*Turdus ruficollis*), version 1.0. In *Birds of the World* (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA.(online) <https://doi.org/10.2173/bow.retthr1.01>, accessed 2022-12-7
- Gill, F, D Donsker & P Rasmussen (Eds). 2022. *IOC World Bird List (v 12.2) DRAFT*. Doi 10.14344/IOC.ML.12.2.(online)

- <http://www.worldbirdnames.org/>, accessed 2022-12-7
- McCarthy, E. (2006) Handbook of Avian Hybrids of the World, pp583. Oxford University Press, New York. (online)
https://www.researchgate.net/publication/329192160_Handbook_of_Avian_Hybrids_of_the_World, accessed 2022-12-7
- 日本鳥学会 (2012) 日本鳥類目録 7 版, 601pp. レタープレス株式会社, 東京.
- 日本野鳥の会鹿児島 (2013) 野鳥情報. るりかけす (140) :16.
- 日本野鳥の会かごしま県支部 (2021) 投稿写真. るりかけす (169) :8.
- NPO 法人奄美野鳥の会 (2009) 奄美の野鳥図鑑, 335pp. 文一総合出版, 東京.
- 関伸一・所崎聡・溝口文男・高木慎介・仲村昇・ファーガスクリスタル (2011) トカラ列島の鳥類相. 森林総合研究所研究報告 vol, 10(4) :183 – 229. (オンライン)
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/bulletin/421/documents/421-1.pdf>, 2022 年 12 月 7 日最終閲覧
- Shirihai, H & Svensson, L (2018) HANDBOOK OF WESTERN PALEARCTIC BIRDS Volume I Passerines: Larks to *Phylloscopus* Warblers, 648pp. HELM, London.
- Svensson, L. (2011) ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド (村田 健 (訳)・尾崎清明・茂田良光 (監訳)), 343pp. 文一総合出版, 東京.
- 所崎聡・山元幸夫 (1999) 鹿児島県産鳥類リスト. 鹿児島県立博物館研究報告 (18) :21-42. (オンライン)
https://www.pref.kagoshima.jp/bc05/hakubutsukan/shien/documents/6329_20120225154117-1.pdf, 2022 年 12 月 7 日最終閲覧
- 梅垣佑介 (2015) 日本産大型ツグミ類・コンプリートガイド. BIRDER vol, 29 (2) : 8-17.
- Winkler, D. W., S. M. Billerman, and I. J. Lovette (2020) Thrushes and Allies (Turdidae), version 1.0. In Birds of the World (S. M. Billerman, B. K. Keeney, P. G. Rodewald, and T. S. Schulenberg, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. <https://doi.org/10.2173/bow.turdid1.01>, accessed 2022-12-7
- Young Guns (2013) Young Guns の野鳥ラボ#02 大型ツグミ類の中間個体. BIRDER vol, 27(5) :42-44.